

色の好みと性格の関連性認識に関わる要因

Contributing factors on color preference-personality stereotype

大塚 聡子*1

Satoko OHTSUKA

根津 莉菜*2

Rina NEZU

1. 問題と目的

色は視覚によって知覚される表面特徴の1つである。色の情報源は、物理的には特定波長域の電磁波（光）であり、人が知覚する色は光に含まれる波長成分に密接に関連する（Hurvich, 1981）。一方、人が認識する色はその物理的特性のみに依存するわけではない。たとえば色の恒常性や対比、あるいは残効のように、実際には異なる波長光から同じ色が認識される現象、あるいは同じ波長光から異なる色が認識される現象がある（篠森, 2007）。このように、人が認識する表象としての色は心理現象である。

色は人にさまざまな連想をもたらし（大井・川崎, 2001）、認知的・感情的に影響する（近江, 2005）。色の心理的効果の1つに色の好み（color preference）がある（千々岩, 2001）。色の好みに関する調査は世界各地で行われている。それらの結果に基づき、個人の色の好みは、共通要因と集団要因、個人要因、誤差により決まると説明されることがある（近江, 2005）。最初にあげられている共通要因は、複数の国際調査の結果から示唆される。たとえば千々岩（1999）による大規模な国際調査や、Saito（1996）によるアジアでの調査によると、地域や文化に関わらず比較的少数の色（青や赤、白など）が好まれる傾向がある。

この要因に関わる生物学的な共通基盤が示唆されることがあるが（ex., Hurlbert & Ling, 2007）、確証は得られていない。第2の集団要因は、文化や年齢、性差などをさす。文化による色の好みの差については、近年、色に基づく感情（Ou et al., 2004）や生活環境の生態学的要因（Yokosawa et al., 2015）などによる説明が試みられている。

色の好みに関する個人要因については、過去の体験のほかに、個人の性格があげられる場合がある（例えば、千々岩, 2001）。しかし色の好みと性格の関係は明確でない（近江, 2005）。この主題に関する研究の多くは、個人の色の好みと性格検査の結果との相関関係を検討している（ex., Ireland et al., 1992; Zuber et al., 1988）。それらの一部は有意な相関関係を報告しているが、否定的な結果を報告するものも多い。そのような中で、杉田（2010）は、両者に関係があると考える者と、関係はないと考える者がいる点に注目した。杉田の調査によると、関係があると考える者は調査対象者の約70%であった。彼女はさらに、両者に関係があると考える者のみを抽出して、色の好みと性格得点の関連性を多角的に検討した。結果として、いずれの性格因子についても特定の色の好みとの有意な相関を見出すことができなかった。この報告は色の好みと性格との関連性を支持しない。

学術的に明確な根拠がないにもかかわらず多く

*1 埼玉工業大学人間社会学部心理学科

*2 埼玉工業大学人間社会学部心理学科2013年度卒業

の人が「個人の色の好みと性格に関連性がある」という認識傾向（ここでは色彩ステレオタイプと呼ぶ）をもつ理由として、過去の体験や、心理的反応の般化のような心理学的機制が関与している可能性がある。本研究の目的は、これらの可能性について検討することである。調査1では、特定の色を好む人の性格印象評定と、実際にその色を好む人の性格得点との関連性を検討する。両者に関連性があれば、色彩ステレオタイプは、特定の色を好む人に接触した体験に基づき形成されるという可能性が示唆される。調査2では、特定の色のものへの印象評定と、その色を好む人への印象評定との関連性を検討する。両者に関連性があれば、色彩ステレオタイプは、色から受ける印象を、その色を好む人物への印象に般化させるような心理学的機制に関連する可能性が示唆される。なお、本研究では典型的な色が単独で呈示された場合の好みを対象とする。調査では青・赤・緑の3色を中心に分析する。

2. 調査1

調査1は調査1Aと調査1Bの2回にわけて実施した。

(1) 方法

対象者 埼玉県内の大学の学部学生であり、調査1Aでは75名（男性51名、女性24名）、調査1Bでは53名（男性37名、女性16名）だった。

調査票（調査1A） 以下のように構成した。

① **表紙** 調査の概要やデータの取り扱いについて説明し、協力を依頼した。また、調査参加への同意を表明する欄を設けた。参加に同意する場合には、性別と年齢の記入を求めた。

② **色の好みと性格の関連性を問う質問** 個人の色の好みと性格との間に関連性があると思うかどうか、「関係しない」から「関係する」までの5

段階で回答を求めた。この質問で「どちらともいえない」、「どちらかという関係する」、「関係する」を選択した回答者のみに次の③の回答を求めた。

③ 特定の色を好む人の性格印象を問う質問

青、赤、緑、黒のそれぞれの色を好む人物、および特定の好きな色がない人物を想定してもらい、その人物への印象評定を求めた。評定にはBig Five短縮版（内田・中畝, 2004; 萩生田, 2010）を用いた。下位尺度は「外向性」、「情緒不安定性」、「開放性」、「勤勉性」、「協調性」の5つであり、1つの下位尺度における質問は4項目ずつ、計20項目であった。それぞれの回答について、「1. まったくあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」までの7段階で回答を求めた。

調査票（調査1B） 以下のように構成した。

① **表紙** 調査1Aにおけるものと同じだった。

② **色の好みを問う質問** Visual Analogue Scale (VAS) 評定と自由回答により、好きな色の回答を求めた。VAS評定では、青、赤、緑、黒、黄、黄緑、オレンジを対象とし、それぞれ15×15mmの色パッチと色名により提示した。回答用線分は100mmで、左端を「非常に嫌い」、右端を「非常に好き」として、この線分に交わるように斜線を記入することで好みの程度を表すように求めた。自由回答では、好きな色があれば最大3つまで記入するように求めた。

③ **性格を問う質問** 調査1Aで用いたBig Five短縮版により、回答者自身の評定を求めた。

手続き 大学にて毎週開講される講義時間を利用し、連続する2週にわたって実施した。それとは別に個別に調査参加を依頼した。その場合も1週間程度以上の間隔をおいて2回の調査を行った。いずれの場合でも調査票は個別に配布した。その後、調査は無記名で実施し、回答者を特定することはないこと、回答は任意であり、回答しないことによる不利益がないことを口頭で説明した。そのうえで、調査票表紙面にて参加への同意を表明

した方のみ回答をするように求めた。調査票は回答終了後に個別に回収した。そのほか調査票やデータの取り扱いについては日本心理学会倫理規定に従った。

(2) 結果

調査への参加に同意し、かつ回答もれのなかった52名（調査1 A）と47名（調査1 B）の回答をもとに分析を行った。以下では青・赤・緑の3色についての分析結果を記す。

色彩ステレオタイプと性格印象 調査1 A②「色の好みと性格の関連性を問う質問」への回答は、「関係しない」=8名、「どちらかというとな関係しない」=11名、「どちらともいえない」=7名、「どちらかというとな関係する」=19名、「関係する」=7名だった。この質問で「どちらともいえない」以降の選択肢を選んだ33名を対象に、調査1 A③「特定の色を好む人の性格印象を問う質問」への回答を得点化した。結果を図1に色ごとに示す。得点範囲は1から7である。

色の好みに基づく性格得点 調査1 B②「色の好みを問う質問」への回答をもとに、青を好む者14名、赤を好む者10名、緑を好む者5名を抽出した。これらの回答者を対象に、調査1 B③「性格を問う質問」への回答を得点化した。結果を図2に示す。

性格印象と性格得点 色ごとに、性格印象の評定値と性格得点とを比較した。代表的な例として、青に関する結果を図3に示す。図3より、2つの曲線の類似性は高くないことがわかる。青の結果について下位尺度ごとに評定値の差を検定したところ、「外向性」において有意差傾向が認められた ($t(45)=1.72, p<.10$)。他の色でも同様の結果が得られた。評定値素点あるいは対象とした全回答に対する個別素点の標準得点（大塚・杉田, 2012）に基づき、印象評定と性格得点の相関係数を求めたところ、 $r=-0.30$ から $+0.49$ と全体的に低く、いずれも有意性は認められなかった。

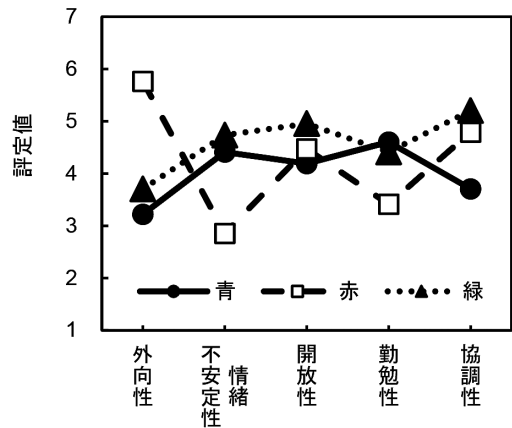


図1. 色の好みに基づく性格印象（調査1 A）

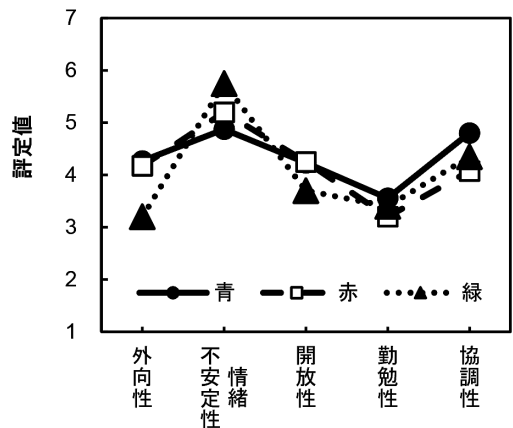


図2. 色を好む者の性格得点（調査1 B）

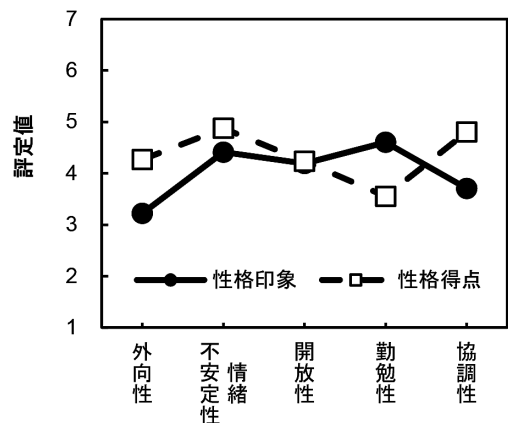


図3. 性格印象と性格得点（青）

(3) 考察

色彩ステレオタイプを有する人の割合は50%だった。また、特定の色が好きな人の性格印象評定と、実際にその色が好きな人の性格得点に統計的な関連性は認められなかった。

性格印象の評定値(図1)は全体的に散布度が大きく、個人間に一貫した傾向がないことが示唆された。このことは、色彩ステレオタイプにおける認識内容に個人差があることを示唆する。さらに、特定の色を好む人の性格得点(図2)は、標本数が少ないことを考慮しても全体的に色による平均値の差が小さく、また散布度が大きかった。このことは個人の色の好みにより性格得点が大きく変わらないことを示しており、色の好みと性格の関連性を支持しない。

3. 調査2

(1) 方法

対象者 埼玉県内の大学の学部学生69人(男性48人、女性21人)だった。

調査票 調査票は以下のように構成した。

① **表紙** 調査の概要やデータの取り扱いについて説明し、協力を依頼した。また、調査参加への同意を表明する欄を設けた。参加に同意する場合には、性別と年齢の記入を求めた。

② **色の印象を問う質問** 赤、青、黄、黒、黄緑の5色それぞれへの印象をSD法で評定するように求めた。使用した形容詞対は、「積極的な—消極的な」、「明るい—暗い」、「暖かい—冷たい」、「派手な—地味な」、「静かな—騒がしい」、「強い—弱い」、「落ち着いた—落ち着きのない」、「外向的な—内向的な」、「感情的な—理性的な」の9つであり、評定は5段階だった。これらの形容詞対は、色と人物の評定の両方に適用できるものとして採用した。

③ **特定の色を好む人の印象を問う質問** ②であげた5色について、それぞれの色を好む人を想定し、その人物に対する印象を②と同じ方法で評定するように求めた。

手続き 講義時間内または個別の時間帯に実施した。調査1と同様の説明を行い、調査票表紙面にて参加への同意を表明した方のみ回答をするように求めた。調査票は回答終了後に個別に回収した。そのほか調査票やデータの取り扱いについては日本心理学会倫理規定に従った。

(2) 結果

調査への参加に同意し、かつ回答もれのなかった55名の回答をもとに分析を行った。まず色への印象評定を得点化し、評定プロフィールを作成した。結果を図4に示す。得点範囲は1から5である。図では評定値が低いほど左軸に示された形容詞によくあてはまると評定されたことを示す。続いて、それぞれの色を好む人への印象評定も同様に処理した。結果を図5に示す。最後に、図4と図5に示した結果を色ごとに比較した。代表的な例として、青に関する結果を図6に示す。図6より、2つのプロフィールがよく似ていることがわかる。色への評定値と、その色を好む人物への評定値との相関係数を求めたところ、いずれの色でも高い正の相関が認められた(青、赤、緑の順に、 $r_s=+0.98, +0.97, +0.87, p_s<0.01$)。

(3) 考察

大山・田中・芳賀(1963)でも示されたように、それぞれの色に対する評定は大きく異なった(図4)。つまり、それぞれの色によって異なる感情的・認知的反応が引き起こされるといえる。

ある色を好む人に対する評定は、色そのものに対する評定とよく似ていた(図6)。この結果は、人物に関する印象形成に対して、色の好み情報が影響することを示唆している。つまり、他者につ

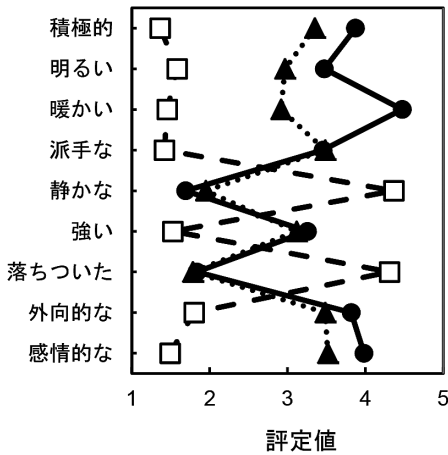


図4. 色の評価プロフィール

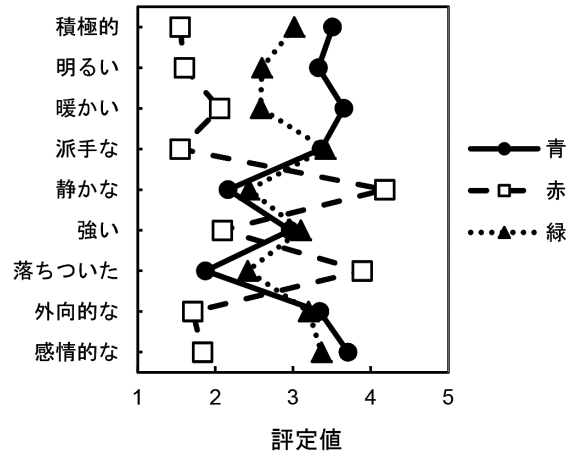


図5. 色を好む人物の評価プロフィール

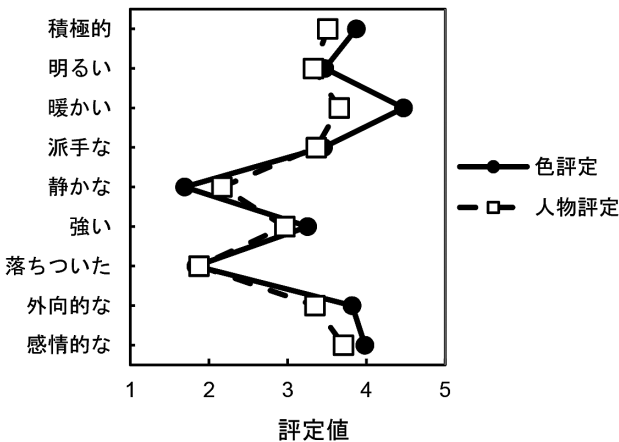


図6. 色の評価と色を好む人物の評価 (青)

いて「特定の色を好む」という情報をもたらされると、その人物に関する印象が、その色により引き起こされる感情的・認知的反応を手がかりに、その反応に近づくように形成・修正される可能性が考えられる。

4. 全体的考察

特定の色を好む人の性格印象評定と、実際にその色を好む人の性格得点との間に関連性は認めら

れなかった(調査1)。このことは、特定の色を強く好む人に接触した体験に基づいて色彩ステレオタイプが成立すると説明に合致しない。個人の性格にも色の好みにもそれぞれ多様な要因が関わっており、両者の相互寄与はあるとしてもその影響は小さいことが推察される。

色そのものへの印象評定と、その色を好む人への印象評定との間には高い類似性が認められた(調査2)。この結果より、色彩ステレオタイプに関する1つの説明を提案することができるだろう。つまり、色彩ステレオタイプとは、特定の

色により引き起こされる心理的反応を、それに親和的態度(好み)を示す人物の印象に般化・投影する心理学的機制に関連している、という説明である。色の印象にはその多様な連想(大井・川崎, 2001)が関与するだろうが、その内容の一部が人の属性印象に重複することは十分にありえる。このように考えると、色彩ステレオタイプのような性格認識傾向は、連想をもたらすさまざまな事象についても生起すると予想される。

調査では対象者の半数が色彩ステレオタイプを

もつことが示された。ただしそのステレオタイプは頑健な具体的内容を伴わない可能性がある。調査1における印象評定値は全体的に分散が大きく、色の好みに関連する性格特性の認識について個人間に一貫した傾向がないことを示唆する。色彩ステレオタイプについて検討するには、このような頑健性・安定性の観点に立つことも有効だろう。

本研究では調査手続き上の種々の制約があった点は留意すべきである。特に調査2で使用した形容詞対は、色と人物の両方の評定に適用できるものであった。そのため、色や人物に対する対象者の評定のうち、限定された一側面のみを抽出して分析対象とした可能性がある。色印象と人物印象のように質的に異なることが予想される表象の関連性を検討するには、このような点を考慮する必要があるだろう。

5. 引用文献

- 千々岩英彰 図解 世界の色彩感情事典 河出書房新社 1999.
- 千々岩英彰 色彩学概説 東京大学出版会 2001.
- 萩生田伸子 調査年次によるBig Five モデル因子構造の差異の予備的検討 埼玉大学紀要 教育学部, 59 (1), 171-177, 2010.
- Hurlbert, A. C., & Ling, Y. Biological components of sex differences in color preference. *Current Biology*, 17 (16), 623-625, 2007.
- Hurvich, L. M. *Color vision*. Sinauer Associates: Sunderland, MA, 1981.
- (ハーヴィッチ L.M. 鳥居修晃・和氣典二 (監訳) カラー・ヴィジョン 色の知覚と反対色説 誠信書房 2002.)
- Ireland, S., Warren, Y. M., & Herringer, L. G. Anxiety and color saturation preference. *Perceptual and Motor Skills*, 75, 545-546, 1992.
- 大塚聡子・杉田維 色の好みと性格の関連性の検討 埼玉工業大学人間社会学部紀要, 10, 37-44, 2012.
- 大井義雄・川崎秀明 色彩 (カラーコーディネーター入門) 日本色研事業 2001.
- 近江源太郎 6. 色彩感情 色の百科事典 日本色彩研究所 (編) 丸善株式会社 124-149, 2005.
- Ou, L. C., Luo, M. R., Woodcock, A., & Wright, A. A study of colour emotion and colour preference. Part III: Colour preference modeling. *Color Research & Application*, 29 (5), 381-389, 2004.
- 大山正・田中靖政・芳賀純 日米学生における色彩感情と色彩象徴 心理学研究, 34 (3), 109-121, 1963.
- Saito, M. A comparative study of color preference in Japan, China and Indonesia, with emphasis on the preference for white. *Perceptual and Motor Skills*, 81, 115-128, 1996.
- 篠森敬三 色覚II 色の見えとその多様性 内川恵二 (総編集)・篠森敬三 (編集) 講座 感覚・知覚の科学 視覚I 朝倉書店 151-202, 2007.
- 杉田維 好きな色で性格は分かる? 埼玉工業大学人間社会学部心理学科卒業研究報告書, 2010.
- 内田照久・中畝菜穂子 声の高さと発話速度が話者の性格印象に与える影響 心理学研究, 75 (5), 397-406, 2004.
- Yokosawa, K., Schloss, K. B., Asano, M., & Palmer, S. E. Ecological effects in cross-cultural differences between U.S. and Japanese color preferences. *Cognitive Science*, DOI: 10.1111/cogs.12291, 2015.
- Zuber, I., & Ekehammar, B. Personality, time of day and visual perception: Preferences and selective attention. *Personality and Individual Differences*, 9 (2), 345-352, 1988.